

## WHO報告1

## 「第2回 経穴部位国際標準化に関する非公式諮問会議」の報告

形井 秀一

全日本鍼灸学会理事、筑波技術短期大学鍼灸学科教授

会期：2004年3月17-18日

会場：中国中医研究院（中華人民共和国、北京、東直門）

## 出席者

Professor Wang Xuetai 王雪苔（アドバイザー）  
 Professor Li Ding 李鼎（アドバイザー）  
 Professor Huang Longxiang 黄龍祥（アドバイザー）  
 Professor Shuichi Katai 形井秀一（アドバイザー）  
 Dr Kenji Kobayashi 小林健二（アドバイザー）  
 Dr Hisatsugu Urayama 浦山久嗣（アドバイザー）  
 Professor Kang Sung-Keel 姜成吉氏（アドバイザー）  
 Professor Lee Hye-Jung 李惠貞（アドバイザー）  
 Professor Kim Yong-Suk 金容奭氏（アドバイザー）  
 Professor Jin Zhigao 晋志高（オブザーバー）  
 Professor Shoji Shinohara 篠原昭二（オブザーバー）  
 Dr Kika Urayama 浦山きか（オブザーバー、通訳）  
 Dr Choi Seung-Hoon 崔昇勲（主催）

## I. はじめに

経穴の部位を世界統一するという動きが、WHO-WPRO（WHO西太平洋地域事務局）主導で動き出している。昨年10月に伝統医学担当官がDr. Choi Seung-Hoonに代わって最初の大きな仕事である。1989年のジュネーブでの経穴名の世界標準化以来、15年ぶりに経穴に関する統一の機運が出てきたといえよう。今回は、経穴部位の標準化である。

してそれぞれの主張を譲らず、結果的に統一した見解にまとめることができなかった。取穴法は日本独自の基準線を作成してそれを認めてもらおうと最後まで努力したが、結局、各国間の調整がつかず、物別れに終わり、日本側の主張は採用されず、世界標準化もできなかった。

また、日本経穴委員会は統一された経穴表記法に基づき1990年に『標準経穴学』（医歯薬出版）を上梓したが、日本国内の教育機関で使用されている（社）東洋療法学校協会編の『経絡経穴概論』（医道の日本社）と盲学校理療科用図書編纂委員会編の『基礎理療学Ⅱ（経絡経穴概論）』（日本ラ

## II. 経穴名・部位世界標準化の経緯

1989年には、各国が経穴の部位や取穴法に関

イトハウス)のいずれにも、この世界統一表記は採用されておらず、日本国内では経穴表記が一本化されずに、現在に至っているのが実情である。

中国と韓国の国内事情の詳細は分かりかねるが、少なくとも、1989年のジュネーブ会議の最終決定を経て、両国では標準経穴を踏まえた教科書を作成して、世界基準に沿った経穴の教育を行っていると述べている。

1989年以前の日本経穴委員会(第一次)の活動については、矢野 忠教授にまとめていただいたので『WHO報告2』に掲載する。

### Ⅲ. 経穴部位標準化の必要性の背景

ご存知のように、WHOは、医学や薬学分野で用語や分類の基準などを世界的に統一する動きを常に行って来ている。最近の鍼灸の分野では、1996年に37疾患の適応症をリストアップし、1999年には"Guidelines on basic training and safety in acupuncture"をまとめている。WHOの立場としては積み残しの経穴部位の標準化は次の作業として必然的なものであると言えよう。

また、世界的な医療分野での新たな動きとして、90年代に活発になった相補代替医療(CAM)が盛んに研究され、健康分野で重要な意味を持つようになり、普及しつつあることとも今回の動きが連動しているという見方もできるかもしれない。CAMの中では鍼灸が最も代表的なものとして考えられているからで、鍼灸の研究を世界的に効率的に進めるためにも、経穴部位の統一は最低限の約束事であろう。

さらに、鍼灸の分野に限っても、1997年には、NIH(National Institute of Health、米国国立衛生研究所)が「鍼の合意形成声明」を出し、2000年にはBMA(British Medical Association、英国医師会)が"Acupuncture: efficacy, safety and practice"、また、BMAS(British Medical Acupuncture Society、英国鍼灸学会)が"Code of Practice & Complaints Procedure (version 2)"を、さらに2004年には、『日本鍼灸医学(経絡治療学会)』の英語訳本として"Traditional Japanese Acupuncture, Fundamentals of Meridian Therapy"が出るなど、鍼灸に関係する見解やガイドライン、

各国の特徴ある鍼灸の英語訳などが公表され、鍼灸の考え方や用語の統一が、1980年代以上に必要になってきているといえるであろう。中国は1990年代に少なからぬ数の中医学の英訳出版を行っている。

身近なところでは、韓国の韓医師協会と全日本鍼灸学会の積極的な交流の開始(互いの学会誌上で、相手雑誌の優れた論文の翻訳掲載、あるいは、シンポジウム開催など)、WFASの4年毎(以前は3年毎)の学術総会と毎年のシンポジウム開催(2004年10月の学術総会はオーストラリア)、この10年間の鍼灸に関する論文の数の多さなどは、大きなうねりとして今回の動きに影響を与えているといえよう。また、WPROが経穴の位置を統一しようとしている事とは別に、WHOのジュネーブでも、鍼灸の用語(漢方医学用語)の統一をしようとして準備を進めている。2005年には、日本で、日本東洋医学会が中心となって、ファイナルの全世界規模の会議が開催され、そこで、漢方用語が統一決定されることになる予定もある。

このように、一国の鍼灸界のみで鍼灸の考え方や臨床の内容、制度を完結することはできなくなっている。各国の動きが相互に影響し合うことが、最早、特別な事ではなくなっている。一国の、あるいは、ある国の一鍼灸治療院の鍼灸が、世界の鍼灸の動きと連動していることを認識する必要もあるであろう。

### Ⅳ. 会議の概要

北京の会議は正式には「国際標準経穴部位の発展に関する第2回非公式会議、Second Informal Consultation Meeting on Development of International Standard Acupuncture Point Locations」と言い、3月17、18日に中国・北京市東直門にある中国中医研究院の一室で行われた。中国中医研究院は、中国鍼灸研究所があり、中学研究の草創期から今日まで、鍼灸も含め中国の中医研究の中心的な役割を担ってきた。

中国の出席者(アドバイザー)は中国針灸学会高級顧問の王雪苔氏のほか、中国中医研究院の黄龍祥、晋志高の両氏、上海中医薬大学の李鼎氏の4人で、韓国からはアドバイザーが3名、いずれ

も慶熙大学に所属しており、姜成吉氏（韓医科大学校）、李恵貞氏（東西医学大学院）、金容奭氏（東西医学大学院）であった。日本からは著者と北里研究所東洋医学総合研究所客員研究員の小林健二氏、経絡治療学会学術部員の浦山久嗣氏の3人が発言権のあるアドバイザーとして出席し、明治鍼灸大学教授の篠原昭氏がオブザーバーとして、また、北里研究所東洋医学総合研究所客員研究員の浦山きか氏もオブザーバー兼通訳として同席した。このほか、WPROの伝統医学担当官の崔昇勲氏（Dr. Choi Seung-Hoon）も、もちろん、主催者として出席した。

議長は王雪苔氏、副議長は李恵貞氏、レポーターは黄龍祥氏と形井秀一と決まった。

会議は、本会議の基本的な獲得目標であった部位決定のための原則の決定に重点を置いて審議され、①経穴部位決定の理論および方法、②経穴部位決定のための体のランドマーク（基準点）および体表点、③骨度法、④標準経穴部位表記の方法、について基本的な考え方が同意された。

また、10月に、日本で第3回の会議を開催することが決定され、各国が同意できる経穴部位の決定と、異論のあるツボの位置の検討、および、英語表記の内容が検討される事となった。

#### IV. 今後の動き

今後の予定として、①2004年4月25日に第二次日本経穴委員会を発足。②7月末までに、中国、日本、韓国の3か国間で共通と認められる経穴部位の日本案作成。③8月末までに共通と認められる経穴部位の表記法の案を中国が作成。④その内容を各国で検討。⑤共通でないものは各国案を作成。⑥10月中旬に日本で、第3回非公式会議を開催し、共通経穴部位の決定とその他の経穴部位の検討を行う、ことが決まっている。

第二次日本経穴委員会は、準備協議会として、全日本鍼灸学会、日本鍼灸師会、東洋療法学校協会、日本理療科教員連盟、日本東洋医学会の5団体が参加して、4月25日に発足するが、日本国内での経穴部位の統一のための検討を十分に行い、世界標準が決定されれば、それを教育の際の標準部位（標準経穴名はもちろんのこと）として、教育していただきたいと考えている。

#### WHO Report 1

### Report of the "Second Informal Consultation Meeting on the Development of International Standard Acupuncture Point Locations"

17-18 March 2004

Beijing, People's Republic of China

KATAI Shuichi

Department of Acupuncture and Moxibustion, Tsukuba College of Technology

I attended the Second Informal Consultation Meeting on the Development of International Standard Acupuncture Point Locations held on 17-18 March 2004 in Beijing.

I would like to report on this Beijing Meeting and the progress and future of the Japan Acupuncture Point Committee.

*Zen Nippon Shinkyu Gakkai Zasshi (Journal of the Japan Society of Acupuncture and Moxibustion: JJSAM). 2004; 54(2): 191-193*